

平成 30 年度 試行調査 (プレテスト) 設問別分析 世界史 B

大学入試センターホームページ (「問題のねらい」等は下記からご覧ください。)

https://www.dnc.ac.jp/daigakunyugakukibousyagakuryokuhyoka_test/pre-test_h30_1111.html

試験時間 : 60 分

※設問数は「正しくマークしたときに得点が与えられるまとまり」としてカウントしています。

大問番号 (配点)	分野	設問数 ※	テーマ・出典	分析コメント
第 1 問 (24)	中世・近世を中心とする政治・経済・社会	8	世界史における接触と交流	<p>A 大規模な人の移動を示した地図を活用した問題。 問 1 : ①はシチリア島の、②はエチオピアの位置を知っていれば、歴史的知識がなくても誤文だとわかる。 問 2 : 事例あ～えの正誤判定をした上で、説明 X・Y の組合せを選ぶのだが、事例の 4 つのうち複数正しい項目があるため、それぞれを念頭に置きつつ説明 X・Y を読む必要があり、形式が複雑。むしろ、矢印 c または d の説明として該当する Y を先に見つけ出し、そこから正しい組合せとなる事例に戻るという、問題が求めている方向とは逆の解き方がわかりやすい。「正攻法」で解く方が時間と労力がかかる問題である。 問 3 : 「接触した可能性がある勢力の組合せ」として誤っているものを問うており、時代判定問題となっている。</p> <p>B 作成年代の違う二つの地図を利用した問題。地図の特色や差異に基づく出題であり、地図を読み取らせることを意図しているが、実際は地図を読み取らなくても正解はできる。 問 4 : サハラ縦断貿易について、センター試験と同様の出題。 問 5 : アについては、「地図 1 の基となった地図が作られた時代」を文章中から「14 世紀」と特定して d を選ぶ。 イは「その間」を地図 1 と地図 2 の間の「200 年」と読み取り、地図 1 が「1402 年」であるから、1602 年までの 200 年間と判断すると、該当するのが a のヴァスコ＝ダ＝ガマと f のマゼランの 2 つとなるのだが、「地図 1 には描かれなかった大陸が増えていて」という文から、地図 2 にアメリカ大陸が描かれていることを読みとって、d と f の組合せである⑥が正解となる。ただし、正解に d と a の組合せがないので、地図 2 を読み取ることなく正解できる。 問 6 : センター試験では a～c の時代配列問題だが、本問ではそれに「地図 1 の作成時期」をいれる形式であり、センター試験にはない形式。地図 1 が朝鮮で作成されたので、朝鮮半島の歴史の時代配列問題に地図 1 の作成時期を組み込んだのだろうが、若干むりやりの感じは否めない。問題文に見える「地図 1 の作成時期」は 1402 年であり、3 つの短文と時代的には大きく離れているので、混乱は少なかったと考えられる。</p> <p>C 「海外旅行の候補地としてカナダに興味を持った林さん」という場面設定である。グラフを読みとる必要がある問題。 問 7 : a がハイチ、d がインドの説明なので除外したうえで、グラフによると、カナダ全体では英語の比率が高いから、ウは「イギリス」という語がある b、ケベック州ではフランス語の比率が高いから、エは「フランス」という語がある c を選択することになり、b・c の短文そのものの正誤判定は不要だった。 問 8 : 移民についての標準的な問題。</p> <p>それぞれ地図やグラフを読みとる必要があるが、どの点に着目すべきかリード文などにすべて述べられているため、大きく混乱することはないだろう。センター試験や第 1 回試行調査にはない形式がみられ、第 1 回試行調査にはなかった「社会生活や日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する場面」が盛り込まれた (C [海外旅行の候補地カナダについて調べた林さん]) 。</p>

大問番号 (配点)	分野	設問数 ※	テーマ・出典	分析コメント
第2問 (23)	古代ヨーロッパ・ 近代アジアを中心とする政治・ 社会・文化	8	世界史上の政治 思想	<p>A ポリュビオスの『歴史』を要約し、説明した文章をもとにした問題。 問1：センター試験とほぼ同じ、2つの空欄に2つの単語からそれぞれ選ばせる空欄補充問題。 問2：問題文の空欄補充問題だが、問題文の前後から「三権分立」を想起し、4つの短文の中から三権分立の説明を選択する。②は王権神授説の説明だが、①と③は概念説明ではないため、選択肢が不自然な出題である。 問3：アテネが「最高度の輝きを放った」時期については、リード文の「最高度の輝きを放った」という引用部分の直前に、「テミストクレスの活躍と時を同じくして」とあるので、ペルシア戦争期だと特定できるようになっている。ただし、センター試験や第1回・第2回の試行調査では、リード文の引用箇所には必ず下線を引くのに、この問題では引用部分に下線がなく、自分で文章を最後まで読んで初めて、このヒントに気付くことになる（引用箇所はリード文の最後の方）。また、「最高度の輝きを放った」という部分を探すが、歴史的な思考力や読解力を試すことになるか疑問である。</p> <p>B 文語体の初見資料（宮崎滔天の回想録）を利用した問題。 問4：センター試験や第1回試行調査にはなかった、リード文中のa～fの6つの空欄に入る2つの国名（1つの国名が複数の空欄に入る）の組合せを選ぶ問題。正しく空欄に入れることができなくても、組合せだけが正しければいいことになる。 問5：資料文からポンセ君がフィリピン人であることから判断する。4択そのものは平易であることから、資料文の読み取りそのものが得点に現れる。つまり、文語体の文章を読むことができるかどうかの問題。 問6：宮崎滔天を知らなくても、リード文から活動を判断する問題。ただし、13で言及したように、資料文が文語体であるため、受験生は読み取りに苦労したであろう。ただし、①の「清国皇帝」は「康有為の意見をいれ」たのだから、政治改革を行おうとする立場、③のコミンテルンは清国があった時代にはまだ存在せず、④「旧守派」が「共和国の樹立を目指す」ことはないだろうと判断すれば、選択肢のうち整合性があるのは②しかないの、資料文を読まなくても正解にはたどりつける。</p> <p>C 日本に留学しているスメラットさんが、友人の香織さんにインドネシアの国章を示し、説明する会話文を利用した問題。 問7：センター試験の形式。 問8：インドネシアの指導者として「スカルノ」を選び、その人物が目指したと「考えられる」ものから“あ”を選ぶ。“い”も排除できないと考えることもできるが、「会話文にあるパンチャシラ（建国五原則）の内容と国章の説明」から、“あ”となる。</p> <p>センター試験や第1回試行調査にはない形式がみられ、第1回試行調査にはなかった「社会生活や日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する場面」が盛り込まれた（C [日本に留学しているスメラットさんと香織さんの会話]）。A・B・Cいずれもリード文を正確に読まないと解けない問題だが、世界史をテーマとした国語の問題というくらいがある。</p>
第3問 (18)	古代・近世のア ジアを中心とす る社会・経済・ 文化	6	世界史上のモノ	<p>A トプカブ宮殿に所蔵されている中国製磁器を利用した問題。 問1：図版の碗の来歴として「推測できる」ものを選ぶ問いで、選択肢はすべて語尾が「だろう」である。問題文に「1541年」とあるので、そこから事実や時代が違う選択肢を排除する、消去法を前提とした問題である。センター試験の問題は、消去法を用いることがあっても、かならず直接的に正答が選べたが、この問題は消去法を用いることが前提になっている。 問2：ア・イともに正しいので、その変化の説明のa～dの4つから正しいbを選び、翻ってこれと正しく組合せることができるイを選択する。 問3：「図2の器のように」と資料を利用した問題のように見えるが、問題文に「18世紀のヨーロッパ」とあるので、図2そのものから情報を引き出す必要はなく、単に18世紀のヨーロッパについての正誤判定問題。ただし、誤っているものとして選ぶ「穀物からパンが作られるようになった」は、いつからパンが作られるようになったか高校教科書に書いていないため、「考えられないもの」として発問すべきだろう。</p> <p>B 大英博物館に所蔵されている南アジアの金貨を利用した問題。 問4：貨幣Xの説明文とは関係なく、a b 2文の正誤判定の組合わせ問題であり、現行のセンター試験の形式。 問5：単に「パルティアを滅ぼした国家」からササン朝を想起し、ササン朝に関連する①を答える。単純ではあるが、「ササン朝」そのものが解答になっているわけではない。「パルティアを滅ぼした国家が何をしましたか」という間接的発問。 問6：貨幣の説明文から、Xがグプタ朝、Yがクシャーナ朝、Zがムガル帝国と判断して、配列する問題。</p> <p>中国製磁器や南アジアの金貨の図版が利用されているが、それそのものから情報を引き出すのではなく、その説明文から情報を引き出す問題である。博物館・美術館所蔵のモノを扱う本問は、諸資料から世界の歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能をもとめる、新学習指導要領の内容を反映しているといえよう。</p>

大問番号 (配点)	分野	設問数 ※	テーマ・出典	分析コメント
第4問 (17)	古代～近代の ヨーロッパ・東ア ジアを中心とす る政治・社会・ 経済	6	世界史上の国家 間の関係	<p>A ポーランド分割の風刺画を利用した問題。 問1：図版を利用しているものの、現行のセンター試験と同様の出題。 問2(1)：「正しいものは複数あるが、解答は一つでよい」問題である。 (2)：(1)で選んだ答えに関連する内容を a～h の 8 つの選択肢から 3 つ選び、さらに、それを年代順に配列する問題である。3 つ選ぶ作業を経た上で、年代順の配列を行う作業が必要なので、非常に複雑である。もし、(1)で③フランスや⑥イタリアを選んでいたら、(2)で該当する選択肢が 3 つないため、ここで(1)の不正解に気付くことになる。</p> <p>B 遊牧国家が中国王朝について言及した時代の異なる二つの初見資料（トルコ語碑文『ビルゲ＝カガン碑文』、モンゴル語年代記『アルタン＝ハーン伝』）を利用した問題。 問3：アにあてはまる「綿織物」か「絹織物」かの 2 択問題は、資料文から判断することになる。「読み取れる事柄」は国語の問題である。 問4：「630年」からこの中国王朝が唐であることを判断し、唐についての短文を選ぶ現行のセンター試験の様式。歴史用語の使用が極力避けられている。 問5：資料2にみられる中国王朝と自国の関係とは異なる立場に立って書かれたと考えられる資料文を 4 択する問題なのだが、資料2にみられる両者の関係を問題文で「自国の優位ないし対等とする立場」と説明してしまっているので、資料2から自分で関係性を読み取る必要はない。したがって、対等か対等でないかを資料文から判断するだけであり、文章を読み取ることができれば、世界史の知識を活用しなくても解くことができる。</p> <p>問2は形式が複雑であり、問3・問5は資料文を読む必要があることから、設問数が少ないが、時間がかかる問題である</p>
第5問 (18)	近現代の社会・ 経済	6	世界史に関わる 経済・統計の資料 に基づく授業を想 定した会話文	<p>A イギリスの綿工業に関する授業において、統計資料を用いて生徒が学習する場面設定。 問1：授業での発言中にある空欄に入れる文として適当でないものを選ぶ問題であり、会話を読まなければいけないように見えるが、正解の③は、文の内容に矛盾があるので、会話を読まなくても不適切だと判断できる。 問2：空欄「イ」についてのグラフの読み取りは容易であり、アメリカ合衆国とすぐに特定できる。そして、「ウ」については、結局「農奴」か「黒人奴隷」かの判断なので、問われている世界史的知識は、アメリカ合衆国と黒人奴隷のみで、単純である。そもそも、「イ」で「インド」を選択した場合の正しい選択肢が、「ウ」にないので、実際はグラフを見なくても解けてしまう。 問3：グラフ2だけでなく、それ以前の表1・グラフ1を読み取るだけの問題。世界史的知識は不要。また、Aでは、表1の下にそれに関連する問1が、グラフ1の下にそれに関する問2があるので、グラフ2の下にある問3は、グラフ2を利用するのかと思いきや、グラフ2だけではなくそれ以前の表1・グラフ1も参考にしなければならない。問題には「先生の指示によって生徒たちが作った次のパネル」とあり、先生は「これまでの表1やグラフ1を参考に」するよう発言しているとはいえ、見逃した受験生もいるのではないかと推察される。</p> <p>B 為替相場と原油価格に関する授業において、統計資料を用いて生徒が学習する場面設定。 問4：会話文の空欄に入れる形式をとっているが、1970年頃までに日本円の相場が動かなかった原因を問う、一般的な政治・経済的問題。 問5：Xの時期のアメリカ大統領をニクソンだと判断したうえで、その政策を選択する問題。内容は現行のセンター試験と変わらない。 問6：Y・Zの時期をそれぞれイラン革命・湾岸戦争と判断したうえで、空欄に補充すべき国名そのものではなく、その国の地図での位置を選ぶ問題。</p> <p>第5問全体が「授業において生徒が学習する場面」設定であった。また、すべて統計資料（表・グラフ）を読み解く必要があり、しかもAでは設問それぞれ別の統計資料がついていること、Bの問6では、グラフの時期を読み取った上で、その時期に起こった出来事を想起し、その出来事に関連する国を地図から選ぶ、という複雑な作業を必要としている。</p>